The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自己の変動的側面はどのような多次元性を有するのか：状態測定用教示が自己認知尺度の因子構造に与える影響
Author(s)	安達, 知郎; 安保, 英勇
Citation	対人社会心理学研究. 2009, 9, p. 81-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8255
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 9, 2009

自己の変動的側面はどのような多次元性を有するのか
—状態測定用教示が自己認知尺度の因子構造に与える影響—

安達知郎(東北大学大学院教育学研究科)
安保英勇(東北大学大学院教育学研究科)

本研究の目的は、自己の変動的側面(以下、変動的側面を「状態自己」、自己の安定的側面を「特性自己」と呼ぶ)がどのように認知されるのかを、認知構造の多次元性という観点から明らかにすることである。本研究では、状態自己と特性自己の因子構造の違いを検証した。調査Ⅰでは314名(男性167名、女性147名)に一般的教示を与えた上で自己認知尺度に答えてもらい、特性自己の因子構造を明らかにした。調査Ⅱでは179名(男性92名、女性87名)に状態測定用教示を与えた上で自己認知尺度に答えてもらい、状態自己の因子構造を明らかにした。そして、両者の因子構造の違いを多角的に考察するために、自己認知尺度の各質問項目が状態自己、特性自己、ビッグファイブ、対人認知、それぞれにおいてどのような因子に属するかを検証した。結果、以下の2点が明らかになった。①状態自己は特性自己に比べ単純な因子構造をもっていること、②状態自己の因子構造は対人認知の因子構造とほぼ同じであること。今後、自己の変動性を研究する上で、状態自己の多次元構造に考慮を払っていくことが重要である。

キーワード: 状態自己、特性自己、教示文、因子構造、自己知覚理論

問題

自己は心理学の重要なテーマのひとつである。その中でも、自己の変動に関する問題、つまり、自己は状況変化に関わらず安定しているのか、それとも自己は状況変化に応じて変化するのかという問題は古くから議論されてきた[1)]。自尊感情研究で有名なRosenberg(1986)は、自己の安定した側面をbaseline self-conceptと呼んで、変化しやすい側面をbarometric self-conceptと呼んで、両者を区別した。実際、Rosenberg(1965)は自己がどれくらい不安定であるかを対象者に直接尋ねる、5項目からなる質問紙を作成している。また、自己の変動的側面を直接、検証するような実験研究も数多くなされている(Fazio, Effrein, & Falender, 1981; 下斗米, 1988; Tice, 1992)。例えば、Fazio et al.(1981)は、外向性を意識させるような質問(「もしあなたがパーティーで陽気になりたいと思ったとき、あなたは何をしますか」など)をした群と内向性を意識させるような質問(「騒がしいパーティーについて、あなたはどんなことが嫌ですか」など)をした群の間で、インタビュー直後の自らの外向性認知に有意な差が見られたことを報告している。

実証的心理学においては、ある概念とある概念を区別する場合、操作的区別が重要な意味をもつ。変動的側面と安定的側面に関して、両者を操作的に区別するためには測定する尺度を区別するという方法がまず考えられるだろう。変動的側面と安定的側面、それぞれを測定する尺度を開発する研究は古くからなされている。そのような研究は、特に感情研究において多く見られる。その代表が、Spielberger, Gorsuch, Lushene, Vagg, & Jacbs(1983)、Spielberger(1988)、Spielberger & Reheiser(2003)による一連の状態－特性尺度開発である。Spielberger et al.(1983)は、状況に応じて変化する不安を状態不安、状況によらず安定して感じられる不安を特性不安として捉え、状態不安・特性不安を測定するSTAI: State–Trait Anxiety Inventory を開発した。また、Spielberger(1988)は、対象を怒りとして、状態怒り・特性怒りを測定するSTAXI: State–Trait Anger Expression Inventory を開発した。これら以外では、自尊感情研究において状態と特性の区別を目的とした尺度開発が多くなされている。自尊感情研究は、Rosenberg(1965)による一連の自尊感情研究にその端を発する。その後、自尊感情が状況の中で即時的に変化することに注目が集まった(代表的なものして、Leary, Tambor, Terdal, & Downs(1995)のソシオメータ説がある)。その結果、状態自尊感情尺度の開発が行われるようになった(阿部・今野, 2007; Heatherton & Polivy, 1991)。状態尺度と特性尺度の具体的な違いは、教示の違いである(質問項目は状態尺度、特性尺度でほぼ同じである)。状態尺度では、教示を「たった今、この場でどれくらい感じますか」(Spielberger, 1988; Spielberger et al., 1983)、「たった今」(Heatherton & Polivy, 1991)、「ふだんではなく今」(阿部・今野, 2007)と変化させている。感情測定尺度の指針を述べたStone(1995 島津訳 1999)も「通常」と教示した場合の回答はパーソナリティ(特性)の指標と見なし、「評定時」と教示した場合の

回答は気分(状態)の指標と見なしている。

以上、感情、自尊感情研究において、変動的側面(状態)と安定的側面(特性)がどのように操作的に定義されてきたかを見た。感情、自尊感情については、自己の変動性との関連が先行研究において指摘されている(安藤, 1989)。自己の変動性と感情との関連については、例えばKernis & Johnson(1990)が、実験参加者に課題に対する成功・失敗フィードバックを与え、変動的な(current)自己と安定的な(typical)自己の変化と感情との関連を検証している。そして、変動的自己の変化については感情との関連が多くみられるが、安定的自己の変化については感情との関連がほとんどみられないことを報告している。自己の変動性と自尊感情との関連については、例えば小塩(2001)がRosenberg(1965)の尺度を元に自己像の不安定性尺度を作成し、それと自尊感情レベル、自尊感情の変動性(自尊感情を 6 日間連続で測定し、その平均値を自尊感情レベル、標準偏差を自尊感情の変動性としている)との関連を調査している。そして、自己像の不安定性が自尊感情レベルに負、自尊感情の変動性に正の影響を与えていることを明らかにしている。阿部(2007)は同様の調査を行い、自己像の不安定性と自尊感情の変動性の間に正の相関は見られるが、それは自己価値の随伴性、確認傾向などを媒介した結果であると述べている。

以上のことから、自己、特に自己の変動的側面と感情、自尊感情との関連は強いと考えられる。そこで以下では、感情研究の流れを踏襲し、自己の変動的側面を「状態自己」(State Self)、安定的側面を「特性自己」(Trait Self)と呼ぶ。状態自己と特性自己を測定する尺度開発の現状はどうであろうか。特性自己を測定する尺度は、数多く存在する。自己記述式のパーソナリティテストの多くは再検査信頼性などによってその時間的安定性を保障されていることから、特性自己を測定する尺度であると考えられる。これに対して、状態自己を測定する尺度はほとんど見られない。STAI (Spielberger et al., 1983)、STAXI(Spielberger, 1988)を開発したSpielbergerは、STPI: State–Trait Personality Inventory(Spielberger & Reheiser, 2003)という尺度を開発している。この尺度は“Personality”という言葉から状態自己・特性自己を測定する尺度であるかのような印象を与えるが、実際はそうではない。STPI は、不安を測定する STAI (Spielberger et al., 1983)、怒りを測定する STAXI (Spielberger, 1988)に、状態うつと特性うつを測定する尺度、状態好奇心(curiosity)と特性好奇心を測定する尺度を加えた尺度である。つまり、この尺度は感情を 4 つの側面から測定する尺度である。4 つの感情をまとめて、便宜的に“Personality”と呼んでいるに過ぎず、本研究のテーマである状態自己とはその概念を異にする。一方、状態自己を直接の研究対象とした上記の実験研究(Fazio et al., 1981; 下斗米, 1988; Tice, 1992)では、形容詞対を用いている。例えば、先にあげたFazio et al.(1981)は外向性に関する10個の形容詞対を測定尺度として採用している。これら実験研究ではいずれも、研究者が測定しようとしている自己の一側面のみを測定している。ビッグファイブ研究からもわかるように、自己は多次元的に構成されている。しかし、これまでの研究で用いられてきた測定方法では、状態自己が有しているであろう多次元性は考慮されていない。つまり、状態自己を測定する方法、および尺度は存在するが、自己の重要な要素である多次元性は状態自己研究においてこれまで考慮されてこなかった。

そこで、本研究では、状態自己の多次元性を探索的に検証することを目的とする。具体的には、同一の自己認知尺度に対して、一般的教示(特性測定用教示)(「自分自身についてお答えください」)と状態測定用教示(「「ふだん」ではなく、「今、この場で」の自分自身についてお答えください」)を与え、それぞれの因子構造がどのように異なるかを検証する。本研究で用いた自己認知尺度は、長島・藤原・原野・斉藤・堀(1967)の SD(Self Differential)尺度である。SD 尺度は 47 組の形容詞対(6 因子)からなり、形容詞対のいずれに自分があてはまるかを 7 件法で答える、SD(Semantic Differential)法に基づく尺度である。この尺度を採用した理由は、自己認知研究において数多く使用されていること(堀内, 1996, 1998)、実験研究(下斗米, 1988)において下位尺度が状態自己の測定に用いられていること、多次元性が保障されていることの 3 点である。一般的教示を与えた場合の因子構造は、長島ほか(1967)の結果を参考にするということも可能であったが、後述するように長島ほか(1967)の因子分析結果には多くの問題が見られたため、本研究では一般的教示を与えた場合のデータを新たに収集した。ただし、抽象度が高く回答の難しい SD 法の尺度を、同一対象者に繰り返し行うことは対象者の負担が大きいと考え、本研究では異なる対象者群に対して一般的教示と状態測定用教示を与えた。

さらに、状態自己の多次元性をより多角的に考察するために、SD 尺度の各質問項目がビッグファイブ、対人認知、それぞれにおいてどのような因子に属するかを検証した。そして、その結果に基づき、状態自己の因子構造とビッグファイブ、および対人認知の因子構

造との比較を行った。ビッグファイブの因子構造との比較を行った理由は、特性自己を測定する尺度と考えられる自己記述式パーソナリティテストの因子構造がビッグファイブに収斂されつつあるからである。一般的教示を与えた場合の SD 尺度の因子構造だけでなく、先行研究が蓄積されているビッグファイブの因子構造との比較を行うことで、特性自己と状態自己の因子構造の相違をより多角的に検証することが可能になるであろう。一方、対人認知の因子構造との比較を行った理由は、Bem(1972)の自己知覚理論によれば、自己認知と対人認知の間には多くの点で共通点が見出されるからである。対人認知の因子構造との比較を行うことで、Bem(1972)の自己知覚理論という観点から状態自己と特性自己の相違を検証することが可能になるであろう。ただし、比較に際しては、SD 尺度、ビッグファイブ、対人認知、それぞれの尺度を構成する質問項目群が異なることに注意しなければならない。因子分析は各質問項目間の関係をみるものであり、全体の質問項目を無視して、ある質問項目だけをとりだすことに意味はない。よって、各質問項目がどのような因子に属するかを検証するという方法では、厳密には因子構造を比較することはできない。しかし、この方法で、因子構造の大まかな比較は可能であろう。そこで、このような限界を踏まえた上で、本研究では各質問項目がどの因子に属するのかを検証するという方法を採用する。

調査 I　一般的教示を用いた場合

方法

SD 尺度に含まれる 47 形容詞対に一般的教示(「自分自身についてお答えください」)を与え、対象者に回答を求めた [2]。そして、その回答を因子分析した。以下、この結果を「一般教示版」と記し、長島ほか(1967)の結果を「オリジナル版」と記す。

対象者　地方にある大学、専門学校の学生 374 名(男性 211 名、女性 163 名)を対象とした。年齢の平均は 21.5(*SD* = 4.5)歳であった。対象者は心理学の講義を受講している学生であり、授業時間中に任意参加の形で、質問紙に回答した。

結果 [3]

回答に不備があった 60 名分の回答を除外し、314 名(男性 167 名、女性 147 名)分のデータを分析した。SD 尺度に含まれる 47 項目について、最尤法による因子抽出の後、エカマックス回転を行った。エカマックス回転は代表的な直交回転法であるバリマックス回転に比べ、各因子の因子寄与が均等化されやすいことが特徴である(芝, 1979)。状態自己の因子構造の多次元

Table 1　一般教示版の因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
臆病な―勇敢な	**.630**	-.013	-.136	-.238	-.138
弱い―強い	**.580**	.111	-.049	-.124	-.279
弱々しい―たくましい	**.545**	.151	-.133	-.196	-.235
不正確な―正確な	**.535**	.203	.135	.160	-.184
無気力な―意欲的な	**.526**	.377	.017	-.093	-.155
地味な―派手な	**.460**	.049	.049	-.071	.192
おだやかな―激しい	**.458**	.212	-.386	-.096	.044
理知的な―感覚的な	**-.363**	.216	.153	-.094	.322
忘れっぽい―物覚えのよい	**.351**	-.267	.261	.050	.113
きちんとした―だらしない	**-.213**	-.142	-.097	-.131	.154
大胆な―小心な	-.335	**-.659**	.032	-.046	.034
元気な―病弱な	-.131	**-.613**	-.112	.001	-.008
いじわるな―親切な	-.024	**.572**	.161	.074	-.314
孤独な―社交的な	.016	**.525**	-.072	-.191	-.172
陽気な―陰気な	-.173	**-.495**	.014	.225	.104
大人っぽい―子供っぽい	.056	**.467**	-.278	.158	.082
角のある―丸い	.099	**.409**	.071	.181	-.093
閉鎖的な―開放的な	.324	**.368**	-.177	-.357	-.305
懐疑的な―信じやすい	-.024	**.332**	-.103	.082	-.123
不潔な―清潔な	.073	**-.317**	.064	-.231	-.094
怠惰な―勤勉な	-.129	-.229	**.589**	-.077	-.090
まじめな―ふまじめな	.277	.059	**-.553**	.027	.152
素直な―強情な	.073	.086	**-.508**	.058	.038
厳しい―やさしい	-.347	.106	**.446**	-.154	.028
無能な―有能な	.122	.050	**.429**	-.077	.177
気持ち悪い―気持ち良い	.181	.150	**.418**	-.163	.128
個性的な―個性のない	.388	-.137	**-.418**	.215	-.158
ひかえめな―でしゃばりな	.194	.240	**-.401**	-.321	-.138
不誠実な―誠実な	.117	.150	**.353**	.080	-.010
不安定な―安定な	.085	-.166	**.320**	-.219	-.046
にぎやかな―静かな	-.092	.097	-.018	**.660**	.022
外向的な―内向的な	-.076	.146	-.306	**.596**	-.156
おしゃべりな―無口な	.008	-.263	.327	**.557**	.257
内面的な―外面的な	.105	-.071	.035	**-.513**	.169
冷静な―情熱的な	-.363	-.189	.217	**-.509**	.080
弱気な―強気な	.303	.001	.391	**-.423**	.338
積極的な―消極的な	.241	-.208	-.342	**.384**	-.073
軽率な―慎重な	.050	.004	-.145	.227	**-.566**
責任感の強い―無責任な	.033	.205	-.122	.232	**.435**
おもいやりのある―自分勝手な	.025	-.133	-.107	-.090	**.427**
暖かい―冷たい	-.059	-.134	-.062	.124	**.422**
気長な―短気な	-.050	.005	.032	-.151	**.394**
感情的な―理性的な	.288	.083	-.056	.343	**-.366**
注意深い―不注意な	-.186	-.127	-.012	-.016	**.338**
敏感な―鈍感な	-.076	-.142	.163	.008	**.334**
頼もしい―頼りない	-.096	-.144	-.085	.263	**.294**
やわらかい―かたい	-.081	-.021	.181	.054	**.234**
分散比率	7.514	7.121	6.712	6.573	5.448
累積分散比率	7.514	14.635	21.347	27.920	33.368

性を検証することを目的としている本研究では、因子寄与の均等化がとくに重要な意味をもつ。そこで、本研究ではエカマックス回転を採用した。因子数はスクリープロットの傾きの変化(6.167、4.218、3.160、2.757、2.566、1.618、1.508、…)から 5 因子とした(Table 1)。

調査Ⅱ　状態測定用教示を用いた場合

方法

SD 尺度に含まれる47形容詞対に状態測定用の教示(「「ふだん」ではなく、「今、この場で」の自分自身についてお答えください」)を与え、対象者に回答を求めた。そして、その回答を因子分析した。以下、この結果を「状態教示版」と記す。

対象者　地方にある大学、専門学校の学生 201 名(男性 102 名、女性 97 名、不明 2 名)を対象とした。年齢の平均は 21.5(*SD* = 3.9)歳であった。対象者は心理学の講義を受講している学生であり、授業時間中に任意参加の形で、質問紙に回答した。

結果

回答に不備があった 22 名分の回答を除外し、179 名(男性 92 名、女性 87 名)分のデータを分析した。47 項目について、最尤法による因子抽出の後、エカマックス回転を行った。因子数はスクリープロットの傾きの変化(9.707、5.634、4.402、1.961、1.728、…)から、3 因子とした(Table2)。

次に状態自己の多次元性を多角的に検証するために、状態教示版の因子構造を一般教示版の因子構造、ビッグファイブの因子構造、対人認知の因子構造と比較した。ビッグファイブとの比較に際しては、形容詞対を用いたビッグファイブ尺度が見つからなかったため、語彙アプローチを採用している村上(2003)のデータ(基本的な性格表現用語 100、p.79)を用いた。そして、SD 尺度で採用されている形容詞(対)が村上(2003)のビッグファイブ研究において、どの因子に最も負荷量が多いかを調べた。対人認知との比較に際しては、SD 尺度で採用されている形容詞対が林(1978)の対人認知研究において、どの因子に最も負荷量が多いかを調べた。また、一般的教示版の因子構造を考察するために、オリジナル版の因子構造との比較も行った。結果, 状態教示版とビッグファイブ、対人認知の因子構造には一定の対応関

Table 2　状態教示版の因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	質問項目	第1因子	第2因子	第3因子
内向的な―外向的な	**-.752**	-.001	.149	正確な―不正確な	.306	**.479**	-.130
陰気な―陽気な	**-.737**	-.056	.168	忘れっぽい―物覚えのよい	-.309	**-.475**	-.019
静かな―にぎやかな	**-.716**	.206	.058	責任感のある―無責任な	.130	**.456**	-.139
積極的な―消極的な	**.691**	.186	-.019	情熱的な―冷静な	.361	**-.431**	-.053
大胆な―小心な	**.679**	.158	.064	子どもっぽい―大人っぽい	-.147	**-.430**	-.089
弱気な―強気な	**-.661**	-.236	-.053	理知的な―感覚的な	-.130	**.429**	.104
おしゃべりな―無口な	**.640**	-.094	-.075	怠惰な―勤勉な	-.114	**-.424**	.141
閉鎖的な―開放的な	**-.638**	.093	.368	理性的な―感情的な	-.209	**.422**	.057
外面的な―内面的な	**.600**	-.131	-.099	安定な―不安定な	.370	**.416**	-.188
でしゃばりな―ひかえめな	**.567**	-.168	.221	清潔な―不潔な	.173	**.380**	-.327
社交的な―孤独な	**.561**	.132	-.350	敏感な―鈍感な	.264	**.373**	.204
弱い―強い	**-.561**	-.321	.044	やさしい―厳しい	-.097	.042	**-.724**
勇敢な―臆病な	**.558**	.298	.073	冷たい―暖かい	-.183	.010	**.661**
意欲的な―無気力な	**.545**	.267	-.175	丸い―角のある	-.006	-.015	**-.656**
弱々しい―たくましい	**-.516**	-.240	.243	思いやりのある―自分勝手な	-.112	.336	**-.551**
地味な―派手な	**-.436**	.031	-.134	激しい―おだやかな	.308	-.261	**.538**
個性的な―個性のない	**.436**	.112	-.070	やわらかい―かたい	.219	-.014	**-.489**
病弱な―元気な	**-.388**	.007	.310	いじわるな―親切な	-.044	-.023	**.485**
だらしのない―きちんとした	.034	**-.625**	.112	強情な―素直な	-.034	.049	**.459**
頼もしい―頼りない	.438	**.610**	-.168	気持ち悪い―気持ち良い	-.277	-.212	**.428**
注意深い―不注意な	.048	**.552**	-.009	懐疑的な―信じやすい	-.111	.365	**.410**
ふまじめな―まじめな	.133	**-.550**	.253	気長な―短気な	-.117	.323	**-.408**
有能な―無能な	.347	**.545**	-.055				
軽率な―慎重な	.230	**-.531**	.136	**分散比率**	16.840	11.261	9.254
誠実な―不誠実な	.164	**.518**	-.415	**累積分散比率**	16.840	28.101	37.355

係がみられた。具体的には、状態教示版の第 1 因子と対人認知の活動性、ビッグファイブの外向性、第 2 因子と対人認知の社会的望ましさ、ビッグファイブの知性、第 3 因子と対人認知の個人的親しみやすさ、ビッグファイブの勤勉性に対応関係がみられた。その他の因子構造については、対応関係はみられなかった(Table 3)。

Table 3 状態教示版と一般教示版、ビッグファイブ、対人認知、オリジナル版との因子構造の比較

状態教示版	質問項目	一般教示版					ビッグファイブ					対人認知			オリジナル版					
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	外向性 E	協調性 A	勤勉性 C	情緒安定 N	知性 O	個人的親しみやすさ	社会的望ましさ	活動性	向性	情緒安定性	強靭性	誠実性	過敏性	理知性
第1因子	内向的な―外向的な				○		○							○	○					
	陰気な―陽気な		○							△					○					
	静かな―にぎやかな				○									○	○					
	積極的な―消極的な				○		△							○			○			
	大胆な―小心な		○														○			
	弱気な―強気な				○												○			
	おしゃべりな―無口な				○		△							○	○					
	閉鎖的な―開放的な		○				△								○					
	外面的な―内面的な				○									○	○					
	でしゃばりな―ひかえめな			○			△					○			○					
	社交的な―孤独な		○											△	○					
	弱い―強い	○															○			
	勇敢な―臆病な	○												○			○			
	意欲的な―無気力な	○								△			○				○			
	弱々しい―たくましい	○												○			○			
	地味な―派手な	○												○	○					
	個性的な―個性のない			○													○			
	病弱な―元気な		○																○	
第2因子	だらしのない―きちんとした	○									△		○					○		
	頼もしい―頼りない					○					△		△				○			
	注意深い―不注意な					○					△							○		
	ふまじめな―まじめな			○									○					○		
	有能な―無能な			○													○			
	軽率な―慎重な ＊					○					△		○					○		○
	誠実な―不誠実な			○					△			○						○		
	正確な―不正確な	○																○		
	忘れっぽい―物覚えのよい	○									△							○		
	責任感のある―無責任な					○						△						○		
	情熱的な―冷静な				○									○						○
	子どもっぽい―大人っぽい		○										○							○
	理知的な―感覚的な	○											○							○
	怠惰な―勤勉な			○														○		
	理性的な―感情的な					○							○							○
	安定な―不安定な			○									○						○	
	清潔な―不潔な		○										○					○		
	敏感な―鈍感な ＊					○							○					○	○	
第3因子	やさしい―厳しい			○					△							○				
	冷たい―暖かい					○			△			○				○				
	丸い―角のある		○									○				○				
	思いやりのある―自分勝手な					○		△				○				○				
	激しい―おだやかな	○														○				
	やわらかい―かたい					○						○				○				
	いじわるな―親切な		○						△			○				○				
	強情な―素直な			○								△				○				
	気持ち悪い―気持ち良い			○												○				
	懐疑的な―信じやすい		○									○							○	
	気長な―短気な					○										○				

註1: オリジナル版に関して、「軽率な―慎重な」「敏感な―鈍感な」は2つの因子に属する。
註2: ○: 形容詞対が該当、△: 形容詞対の片方だけが該当、空欄: 該当なし

考察

一般教示版の因子構造

まず、本研究で新たにデータをとった一般教示版の因子構造について考察する。ビッグファイブとの比較において、因子数はともに5であった。しかし、本研究の結果からは一般教示版の因子内容とビッグファイブの因子内容の間には、明確な関係は存在しないと考えられる(ただし、SD 尺度に含まれる形容詞(対)の多くが村上(2003)に含まれていないため、データは十分ではなく、結果の解釈には慎重でなければならない)。 両者の間に関連性がみられなかった理由として、本研究の質問形式である SD 法と村上(2003)の質問形式である語彙アプローチとの違いが考えられる。村上(2003)が指摘しているように、パーソナリティを研究対象とする場合、質問項目から典型的なSD法項目を除外する必要がある。なぜならば、典型的なSD法項目は評価的用語(社会的望ましさとの相関が高い)からなり、それら評価的用語は評価(Evaluation)、力本性(Potency)、活動性(Activity)という3因子に安定的に分かれることが報告されているからである(岩下, 1979)。つまり、もしビッグファイブ研究において評価的用語を性格表現用語として採用した場合、パーソナリティに見られる因子ではなく、評価的用語に見られる因子(評価、力本性、活動性の 3 因子)の影響が強く出てしまい、パーソナリティの特徴を捉えることができなくなってしまう恐れがあるからである。そのため、語彙アプローチによるパーソナリティ研究では記述的用語(社会的望ましさとの相関が低い)を中心に質問項目を選択する必要がある。この SD 法とパーソナリティ研究における語彙アプローチとの方法論の違いが、一般教示版とビッグファイブの因子構造の違いに影響を与えていると考えられる。

つぎに、オリジナル版との比較について考察する。因子数に関しては、一般教示版、オリジナル版ともに 5 前後であり、同等であると考えられる。一方、因子内容に関しては、両者の間に明確な関係は存在しなかった。つまり、因子間の類似、因子同士の結合・分割などはみられない。両者の間に明確な関係がみられなかった理由として、以下の 3 点が考えられる。①実施年代の相違: オリジナル版は1967年に作成されたものであり、約40年前のデータである。②データ収集法の相違: オリジナル版のデータは、1 人の対象者に「現在の私」「父親からみた私」「母からみた私」など、7 種類の「私」について回答を求めている。つまり、1 人から 7 つのデータをとっている。③因子分析方法の相違: オリジナル版では、因子抽出方法はセントロイド法、回転方法はバリマックス回転、そして、因子数決定方法は不明である。

一般教示版の因子数はビッグファイブともオリジナル版ともほぼ同数であった。つまり、一般教示版は SD 法の基本 3 因子とは異なる因子構造を示した。また、因子内容はビッグファイブ、オリジナル版、いずれとも関連がなかった。この結果をどのように解釈するかは非常に興味深い問題ではあるが、本研究の目的からは外れるのでこれ以上の考察は行わないこととする。

状態教示版の因子構造

まず、一般教示版との比較について考察する。状態教示版と一般教示版では、SD 尺度の因子構造に大きな違いが見られる。状態教示版の因子数は 3 であり、一般教示版の因子数は 5 である。状態測定用教示を与えた場合、より単純な因子構造が得られている。しかし、因子内容については、明確な関係を見出すことは難しい。

次に、ビッグファイブとの比較について考察する。因子数はビッグファイブに比べ状態教示版のほうが少なく、より単純な因子構造が得られている。この点は、一般教示版と同様の結果である。因子内容については、状態教示版の第 1 因子がビッグファイブの外向性(E)と、第 2 因子が知性(O)と、第 3 因子が勤勉性(C)と対応していると考えられる。しかし、上記したように SD 尺度に含まれる形容詞(対)の多くが村上(2003)に含まれていないため、この解釈がどれほどの妥当性を有するかは定かではない。そこで、本研究ではこの点について、これ以上の考察を行わないこととする。最後に、対人認知との比較について考察する。因子数はともに 3 であり、因子内容もほぼ対応している。状態教示版の第 1 因子は対人認知の活動性と、第 2 因子は社会的望ましさと、第 3 因子は個人的親しみやすさとほぼ対応している。よって、状態教示版の因子構造は、対人認知の因子構造とほぼ同じであると結論付けられる。以下、一般教示版、ビッグファイブ、対人認知との比較から、因子数、因子内容について考察をすすめる。

因子数 因子数は、その対象を認知するときの認知次元数と理解することができる。そして、認知する対象が心的に重要であればあるほど、その対象に対する認知は精緻化され、認知次元数は多くなると考えられる。この点に関して、自己に関連する情報が他者に関する情報や一般的情報に比べ多次元的に処理されるかどうかを検討した堀内(1996)は、母親のような熟知度の高い人物は一般的な他者に比べ認知次元が分化していることを示唆した。よって、認知対象が心的に重要であればあるほど、その因子数は多いと考えられる。このことは、一般教示版、ビッグファイブの因子数と対人認知の因子数を比べた場合、心的により重要であると考えられる自己(一般教示版、ビッグファイブ)のほうが他者(対人認知)に比べ、因子数が多いことも矛盾しない。

本研究の結果からは、状態自己を認知する場合(状態

教示版)の次元数は、特性自己(一般教示版、ビッグファイブ)を認知する場合より少なく、他者を認知する場合(対人認知)とは同じであった。よって、心的重要度という観点からは、状態自己は他者と同程度には重要であるが、特性自己よりは重要でないと考えられる。状態自己は即時的にしか存在しないのに対して、特性自己は時間的安定性を有し、継時的に存在する。よって、心的には継時的に存在する特性自己のほうがより重要となるであろう。本研究の結果は、状態自己、特性自己のこの理論的特徴と矛盾しない。

因子内容 状態教示版、一般教示版、対人認知、オリジナル版は、いずれも SD 法に基づいている。しかし、それぞれの因子構造は異なり、先行研究(岩下, 1979)で述べられているようなSD法の共通の因子構造(評価、力本性、活動性の 3 因子)はみられなかった。このことから、本研究で得られた結果は SD 法という方法論による結果ではなく、教示、あるいは認知対象の相違による結果であると考えられる。

状態教示版と対人認知の因子構造において、因子数だけでなく因子内容も同等であることから、状態としての自己を認知する場合、われわれは他者を認知するのと同じ枠組み(認知次元数: 因子数、および認知次元内容: 因子内容)で自己を認知していると言える。この点に関して、Bem(1972)の自己知覚理論の立場から考察する。自己知覚理論では、自己認知と他者認知は認知プロセス、認知の根拠の 2 点について同等であると主張する。認知次元についての直接の言及はないが、自己知覚理論を認知次元にまで援用するならば、本研究の結果は十分、予想されうる。しかし、これだけでは自己認知が他者認知と同等の認知次元をもつことは説明できても、特性自己ではなく、なぜ状態自己の認知次元が他者認知の認知次元と一致するのかは明らかではない。この点に関しては、自己知覚理論の適用範囲が重要である。Bem(1972)は、自己知覚理論の適用範囲を「内的な情報が弱く、あいまい、あるいは解釈できない場合」(p.2)と限定している。特性自己が継時的に存在するのに対し、状態自己は即時的にしか存在しない。よって、特性自己に比べ、状態自己はその情報が少ないと考えられる。そのため、状態自己の場合だけ、他者認知と同等の認知次元が見られたのではないだろうか。ただし、自己知覚理論を本研究の結果に適用する場合、先に述べた、自己知覚理論を認知次元へと適用してよいのかどうか、そして、自己知覚理論の適用範囲がそもそもどこまでなのか(外山, 1990)という 2 つの問題があることを念頭においておく必要がある。

まとめ

本研究では、状態自己の多次元性を探索的に検証するために、自己認知尺度であるSD 尺度に一般的教示、状態測定用教示、それぞれを与え、その因子構造の相違を調べた。また、各質問項目がどの因子に属するかを検証するという方法で、それらとビッグファイブ、対人認知の因子構造との比較を行い、状態自己と特性自己の因子構造の相違を多角的に考察した(先に述べたようにこの方法は大まかなものにすぎず、今後、同一の質問項目を用いて因子構造を比較する、各尺度を同時実施し相関関係を調べるなどの方法を用いて、さらなる検討を行う必要がある)。その結果、状態自己の多次元性に関して、以下の 2 点が明らかとなった。①状態自己は特性自己に比べ、より単純な因子構造をもっていること、②状態自己の因子構造は対人認知の因子構造とほぼ同じであること。この結果からは、従来の実験研究(Fazio et al., 1981; 下斗米, 1988; Tice, 1992)の問題点を指摘できる。つまり、特性自己研究で明らかになった特性自己の一側面を、そのまま状態自己測定に適用することには問題があると考えられる。状態自己を認知する際の認知次元とは異なる認知次元に基づいて状態自己を測定しても、それは状態自己のありのままの姿を捉えているとは言えない。

それでは、状態自己のありのままの姿を捉えるためには、どのような方法が考えられるだろうか。状態自己は上記したようにその場の状況に影響されやすい。自己をとりまく状況が特殊なものであれば、通常の状況では見られないような状態自己の一側面が顕著に見られるということも考えられる。そのような特殊な状況下での状態自己のあり方を研究するためには、各研究が設定する状況ごとに状態自己の多次元性を確認する必要がある。具体的には、研究ごとに質問項目の因子分析を行い、研究が設定する状況下での状態自己の多次元性を明らかにする必要がある。状況に影響されやすい面がある一方で、状態自己には通常の状況下ではある程度、安定しているという面もある。そのような通常の状況下での状態自己のあり方、例えば状態自己と刺激との一般的法則を研究するためには、通常の状況下で一般的に見られる状態自己の多次元性を測定できる、標準化された尺度を作成する必要がある。そうすることで、さまざまな研究結果を比較し、統合することができる。研究ごとに分析を行うか、標準化された尺度を用いるかは研究目的によるが、いずれにしろ、今後、状態自己研究をすすめていく上で、その多次元性に注意を払うことが重要である。

引用文献

阿部美帆 (2007). 自尊感情の変動性の指標に関する検討 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 84-85.
阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.

安藤清志 (1989). 自己概念と行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編) 社会心理学パースペクティブ 1 ―個人から他者へ― 誠心書房 pp.141-160.
Bem, D. J. (1972). Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.6. NY: Academic Press. pp.1-62.
Fazio, R. H., Effrein, E. A., & Falender, V. J. (1981). Self-presentations following social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 232-242.
林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 238-247.
Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 895-910.
堀内 孝 (1996). 自己の性格特性に関する判断 ―自己認知の次元に準拠した処理― 心理学研究, 67, 390-395.
堀内 孝 (1998). 自己認知の多次元性と自己関連付け効果 心理学研究, 68, 484-490.
岩下豊彦 (1979). オスグットの意味論とSD法 川島書店
Kernis, M. H., & Johnson, E. K. (1990). Current and Typical Self-appraisals: Differential responsiveness to evaluative feedback and implications for emotions. *Journal of Research in Personality*, 24, 241-257.
Leary M. R., Tambor E. S., Terdal S. K., & Downs D. L. (1995). Self-esteem as an Interpersonal Monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
村上宣寛 (2003). 日本語におけるビッグ・ファイブとその心理測定的条件 性格心理学研究, 11, 70-85.
長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀 洋道 (1967). 自我と適応の関係についての研究(2) ―Self-Differential の作製― 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-67.
小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
Rosenberg, M. (1986). *Conceiving the self*. FL: Krieger pub co.
芝 祐順 (1979). 因子分析法 第2版 東京大学出版会
下斗米 淳 (1988). 社会的フィードバックが受け手の自己概念変容に及ぼす効果 ―送り手についての受け手の認知が果たす役割― 心理学研究, 59, 164-171.
Spielberger, C. D. (1988). *Manual for the state-trait anger expression inventory (STAXI)*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
Spielberger, C. D., Gorsuch, R., Lushene, R., Vagg, P., & Jacbs, G. (1983). *Manual for the state-trait anxiety inventory*. Palo Alto, CA: Counsulting Psychologists Press.
Spielberger, C. D., & Reheiser, E. C. (2003). Measuring anxiety, anger, depression, and curiosity as emotional states and personality traits with the STAI, STAXI, and STPI. In M. J. Hilsenroth & D. L. Segal (Eds.), *Personality assessment*. NJ: John Wiley & Sons. pp.70-86.
Stone, A. A. (1995). Measurement of affective response. In S. Cohen, R. C. Kessler, & L. U. Gordon (Eds.), *Measuring stress: A guide for health and social scientists*. NY: Oxford University Press. pp.148-171. (島津明人 (訳) (1999). 感情反応の測定 小杉正太郎 (監訳) ストレス測定法 川島書店 pp.213-250.)
Tice, D. M. (1992). Self-concept change and self-presentation: The looking glass self is also a magnifying glass. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 435-451.
外山みどり (1990). 「自己の姿の把握」の段階 中村陽吉 (編) 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 pp.67-110.

註

1) ここで記したように、本研究で扱う自己の変化は、その場で即時的に生じる変化である。発達などを通じて長期的に生じる変化は、本研究では取り扱わない。
2) 質問紙には自尊感情などを測定する質問項目も含まれていた(47 形容詞対は、質問紙の先頭に配置されていた)。形容詞対以外の質問項目は、本研究では分析対象としなかったため、以降、これらについては記述しない。
3) 統計ソフトは SPSS Base system ver.15.0 を用いた。

What are aspects of a variable self-concept?:

The influence of an instruction for the State Self on the factor structure of a self perception inventory

Tomoo ADACHI (*Graduate School of Education, Tohoku University*)
Hideo ANBO (*Graduate School of Education, Tohoku University*)

The purpose of this study is to verify some aspects of a variable self-concept. In this article, a variable self-concept is termed as "State Self", and a stable self-concept as "Trait Self". The factor structural difference between the State Self and the Trait Self was verified. In Research 1, 314 respondents (male: 167, female: 147) answered a self perception inventory created as a measure of the Trait Self. The inventory was used to clarify the factor structure of the Trait Self. In Research 2, 179 respondents (male: 92, female: 87) answered a self perception inventory created as a measure of the State Self. The inventory was used to clarify the factor structure of the State Self. In order to verify the differences in the factor structures of the State Self and Trait Self multilaterally, the results of Research 1 and 2 were verified through comparisons with factor structures of Big Five and person perception. As a result, we found that the factor structure of the State Self was simpler than that of the Trait Self and that the factor structure of the State Self was almost the same as that of person perception. To study the variability of self-concept, it is important to consider various aspects of the State Self.

Keywords: State Self, Trait Self, instruction, factor structure, self-perception theory.